

令和元年度（2019年度）第2回
北海道史編さん委員会産業・経済部会議事録

日 時：令和元年（2019年）12月20日（金）10:00～12:30

場 所：北海道庁本庁舎5階 包括外部審査室

出席者：坂下部会長、奥田委員、青木委員、板垣委員、市川委員、
柿澤委員、小坂委員、小田委員、佐藤委員、東山委員、
満菌委員、宮澤委員、宮田委員

事務局：靄原室長、中谷主幹、伊藤主査、山本主任

1 開 会

2 議 事

- (1) 資料収集状況及び資料編対応年表について
- (2) 今後の予定について
- (3) その他

3 閉 会

1 開 会

【坂下部長】

- ・今回は、皆さんから分担分の枠組みを説明いただいて確認することと、分量的に過不足があればその調整を行いたい。配布した資料1は、先に提示した分担案、資料2はこれまでの資料の収集状況、資料3は皆さんが作成した計画の枠組み、資料4は今後の日程になる。添付した「北海道史への扉」の概要は、「その他」のところで説明する。
- ・まず、議事1「資料収集状況および資料編対応年表について」の前半である資料収集状況について、事務局から説明してほしい。

2 議 事

(1) 資料収集状況及び資料編対応年表について

【事務局】

- ・事務局でまとめた資料2「資料収集状況表」は、大項目の順番で、担当される先生ごとに、これまで事務局経由で収集した資料を一覧にしたもの。資料の並びは資料の作成年次としており、古い順から並んでいる。これからご説明される対応年表と合わせて見ることで、「この時期のものが少ない」「この時期に集中し過ぎている」といったことが見えてくると思う。
- ・ただ、この表に記載した全ての資料が、資料編への掲載候補資料とは言えないと感じている。例えば、研究論文や企業の記念誌といったものは、資料収集の前段作業のためのものと思われる。
- ・この他にも、先生方がお手持ちの資料で、掲載予定のものもあると思う。今回、周知しなかったが、柿澤先生からそのような資料リストの提供を受けたので、表に含めた。
- ・今後、お手持ちの資料で掲載候補として使いたい資料があれば、今回の柿澤先生のようにご連絡いただきたい。当面はリストの送付で構わないが、掲載候補となれば筆耕のために現物が必要になる。

【坂下部長】

- ・表を見ると、事務局を通してどれだけ資料を集めたかがわかると思う。分野によって多寡があるが、何か必要があれば事務局に連絡するなど、活用願いたい。資料はそれぞれで集めてもらうが、使える部分は共有する方向で進めていきたい。
- ・それでは、これまででどのような資料を収集し、どのような資料を掲載するつもりでいるのかといった説明を、順番にしていきたい。

<資料3-1/地域開発>

【小田委員】

- ・何度か文書館の書庫を見学させてもらったが、私が直接文章にして書くような資料が見当たらなかったこともあり、特に事務局を通しての資料収集は行っていない。手持ち資料をリスト化することは念頭になかった。
- ・資料編での私の分担は資料15点程度。北海道開発庁が統廃合になったことも取り上げる必要があるので、2000年を越えることになる。
- ・全部で25の資料をピックアップし、このうちゴシックで書いた15の資料を使って解説を加える予定。北海道に関わる長期計画だけでも10点あり、国・開発庁関係が7点、北海道庁関係が3点。残りの5点は、道内の主要な地域開発計画・事業から選択することになる。

- ・年表は、資料を解説するのに関連するものとして作成した。資料の掲載に関わる部分はゴシックで示して、前述の資料と対応させた。
- ・前回の部会で、浦臼リゾートの問題などについて話したが、そこまで手が回らないので、それぞれの担当にお任せしたい。
- ・苫小牧東部開発の工業開発の部分は、工業担当の板垣先生と重なり、調整が必要になると思われる。

【板垣委員】

- ・私が担当する工業は範囲が広いため、坂下部会長に以前どのように考えるべきかお聞きして、基本的に企業の活動などに重点を置いた方がよいという話になった。例えば農業についても、畜産や乳業を企業がやっていたら自分が担当するものとして説明を受けたので、開発の関係は、小田先生にお任せするというイメージでいたのだが。

【小田委員】

- ・苫小牧東部開発の計画の中身も、背景の変化によって何度も変更しており、私が担当した方がよいと思う。

【坂下部会長】

- ・掲載資料候補として開発計画が並んでいるが、計画を掲載すると相当なボリュームになるのではないか。

【小田委員】

- ・無論全文ではなく、端書きなど要約された部分が中心になる。前の道史では全文掲載されていたが、全部載せるととんでもない量になる。

【坂下部会長】

- ・資料1点あたりで、字数はどの程度になるのか。

【事務局】

- ・以前ご説明した『山口県史 資料編』での平均は、25字×74行＝1850字で、資料1点当たり2ページちょっとになる。

【小田委員】

- ・2ページで15資料を掲載するとなると、30ページ以内に抑えろということ。

【坂下部会長】

- ・資料を上手く切り取ってもらわないと、たくさん入るようで入らない。小田委員の分担予定では、掲載点数を15点程度で34ページ。解説は別に、大項目全体で18ページの計画。

【小田委員】

- ・だから、本当に大事なところだけになる。あとは資料提示する。道庁に行けば全部ある。
- ・これ以外の資料も全部書かなければならないのか。それとも最後に、「こういう資料も他にありますよ」ということを書くのか。

【坂下部会長】

- ・資料2は「今までどんな資料が集まったか」というもので、これを掲載するわけではない。その中から選んで拾い出す。
- ・資料解説は、「他にもあるけどここまで載せた」とか「ここの部分がどうだ」とか、ガイドラインみたいな形で書いていただくことになる。
- ・私が担当する農業でも、篠津運河とかパイロットファームがあるが、重なることはあるか。

【小田委員】

- ・ゴシックで表示したところだけであり、そこまでは手が回らない。

【坂下部長】

- ・小田委員は大きいものをバンと11載せて、残りが(3)の中から選ばれるということ。

<資料3-2/地域経済・雇用>

【奥田委員】

- ・資料にあるように、大きくは2つ、地域経済全般と、雇用・労働市場。雇用・労働市場はここに持ってくるか、労働運動の宮田委員の後ろがよいのか。やはり前なのかということで、ここに挙げている。
- ・時期区分は、最終的にはどこかでまとめる必要があるのではないかと思うが、それはともかく、5つの時期区分に分けて北海道経済の流れを見ることができると考えている。
- ・人口動向や、そこに挙げられている基本的流れを表現するような資料を、どのように出していくのかが非常に難しい。統計を出していく方法もあるが、様々な白書など、人口動向の記述を載せていくという形を取るのかなと思っている。
- ・北海道開発法ができる前に道庁が発足させた総合開発委員会の資料は、まだ十分に確認はできていないが、復興期についてはこれで十分おさえられるのではないか。
- ・3番目の、輸出・機械工業が立ち後れていく時代をどう切り取るのかはまだ白紙。
- ・その後の構造転換の時期について、用語も構造転換とすべきか構造調整とすべきか悩んだ。ここで大きな転換があったと言われているわけで、特に「二テツ・二タン・二セン」は、新聞報道や雑誌などから取ることになるかと思う。
- ・マクロ経済に関しては、その時々所得計算・白書を利用できるのではと思っている。
- ・産業・経済政策は、小田さんとどのように調整するかということがある。その時々産業構造やマクロ経済の現状を踏まえて戦略が変化してくるが、私の部分に関しては、いわゆる経済政策に絞って「その時々政策・戦略は何だったのか」というのを明らかにすることが重要と考えている。
- ・そうすると経済・産業政策の部分がかかなり膨らんでくるので、雇用・労働市場をどうするかが悩ましい。労働市場関係の統計はかなりあるので、白書を利用していくことになるか。
- ・これからの作業では、新聞記事をこの中に配置していくという形になると思う。ただ新聞記事の場合、2ページまでにはならないので、場合によっては少し点数を増やすか、担当するページ数を減らすかといった調整が必要になる。

【坂下部長】

- ・解説のところは小田委員と一緒にするので、ある程度時期区分を合わせていくことになる。とりあえずそれぞれで時期区分をして、その中で何が必要か確認していただく。
- ・雇用などであれば、年越しの時期の記事など、リアルなものがあれば面白い。

【奥田委員】

- ・文書館資料でも、雇用の関係は極めて限定されていた。私の分は70数点載せているが、そのうち雇用の関係で使えるものは極めて限定される。
- ・労働白書や労働資料年報は、ある程度使えると思う。

<資料3-3/農業>

【坂下部長】

- ・私と東山委員が担当する農業の部分は、以前にお渡しした年表から変更はない。
- ・私と東山委員の分担は、前期・後期の時期で分けることにしており、中項目3つを考えていたが、2つのままでもいいかと思っている。
- ・分量を他分野から少しいただくことになるかもしれない。
- ・あまり仕事の進んでいないが、戦後開拓、戦後の農地開発の部分では、収集状況表の3ページ目に載せているが北海道農地開発協会の資料があり、世界銀行とのやりとりで英語の報告書などが面白いと思った。また満州から引揚げた第一移民の資料が標茶町にあった。
- ・私は、前半の時代を少し詰めている状況。東山さんはあまり手がついていないが、いろいろと道内歩き回って面白いものを持っているのではないかと。

【東山委員】

- ・資料編はいつまでに作るようになるのかが一番気になる。

【坂下部長】

- ・今後の予定のところで説明する。

<資料3-4/林業>

【柿澤委員】

- ・いわゆる林業に関わるどころと、林産業ということで大きく2つに区分した。
- ・時期区分としては、復興期と、国有林天然林を中心として林業・木材産業が活性化する発展期、その後国有林・天然林から人工林に移行し、民有の人工林を中心に林業・林産業が発展していくという大きな流れがある。
- ・もう一つ、森林の総合的な利用。これは若干観光とも関わるが、総合的利用・多面的機能の重視が90年代頃に出てくるので、それに沿って、林業とその活用や流通加工を見ていきたい。
- ・奥田先生の人口の部分と同様、どちらかといえば統計を見た方がわかりやすいので、個別の文章でどう表現するか悩んでいるところ。
- ・林産業と工業との関わりでは、紙パルプ本体のことよりは、パルプの需給逼迫や、チップ産業の系列化、輸入チップの国産チップに対する影響など、できる限り林業に引きつけた形で棲み分けができればと思っている。
- ・その他として、家具産業に関しても道産品は非常に優れた品質を持っている。資源との関わりで北海道は優位に立っていたが、それが国有林の崩壊とともに海外に移って行った。
- ・炭鉱の坑木を中心に、カラマツなどの林業が成立していたが、それが炭鉱の終了とともに終焉して行った。炭鉱と林業の関わり方の棲み分けをできればと思っている。

【坂下部長】

- ・林業は産業的に見ると、木と資源の問題で林産といい、農学部も昔は林野課と林産課に分かれていた。二本柱なので。
- ・工業との関係は先ほどの理解でいいのか。互いにすり合わせながら進めていただきたい。
- ・統計の問題は、基本的には通史編でやることになっているが、統計としてももの凄く面白いもの、説明するような統計があれば資料編でやれると思う。

【柿澤委員】

- ・王子製紙の解体などは私のところでは扱えないと思う。

<資料3-5/漁業>

【宮澤委員】

- ・まず、水産業じゃなく漁業としたい。つまり、水産加工業や流通業については、あえて入れていない。それは他の分野との重複を考えたのもあるが、ボリュームが膨らむので漁業・養殖業の生産の方に絞った。もちろん入れることは可能。
- ・項目ごとの資料点数については、最初の計画表では半々になっているが、中項目の漁業政策総論の方が増える可能性が高いので、まだ固定していない。
- ・時代区分については、52年までが占領下の再建期、52年からマッカーサーラインが完全撤廃されて、北洋漁業が一斉にスタートするという、大きな転換が起きる戦後復活期。60年以降を高度成長期にしたのは、そのあたりから急激に道内の価格上昇が顕著になり、典型的な魚価高騰依存型の発展が見られたため。オイルショックあたりから変化し、特に変化が大きかったのが77年の米ソの200海里の設定。国際的に200海里体制が成立するというこの時期で一区分とする。最後は85年以降で、プラザ合意以降の急激な水産物輸入が始まって、日本の水産業全体が影響を受けて再編が進んでいく時期。この区分は、坂下部会長の時期区分と似通ったものになっていると思う。
- ・小項目としては、総論の方では制度改革、国際交渉、特に資源管理栽培漁業がポイントになる。構造改善・基盤整備は、部分的にでも多少は触れる必要がある。
- ・漁協・漁連についてはまだ十分吟味できてないが、多少の項目が出てくると思う。
- ・漁業の地域構成に関して言えば、北洋漁業、沖合遠洋漁業の項目が欠かせない。稲作地帯と酪農地帯のような区分はできないが、エリア的に、サケ定置を中心とした太平洋、ホタテの地蒔き増殖を中心としたオホーツク、ホタテ昆布養殖で立ち直っていく道南、衰退傾向が近年顕著になっている日本海、といった区分になると思う。
- ・漁業政策に関していうと、戦後北海道では、国の制度改革に先んじて、独自の改革をうち出そうという動きがあったので、そこには是非最初に触れたい。それは、沿岸漁民を中心とした漁場を、広域的に自主管理する道を示すというのが基本的特徴であり、最近の水産改革に反するような動きがあったのが北海道の特徴だと見ている。
- ・その後の高度成長期には、漁船漁業の再編対策や、80年代以降は遊漁のあり方などを道が出したりしている。国際交渉はまだ一次資料はとれていないが、全国初の民間協定になった日ソの昆布交渉は取り上げたいと思う。
- ・二百海里の影響調査なども、触れたい。
- ・資源管理・栽培では、サケマス増殖価格交渉も含めた発展の中で、特徴的なものを取り上げたい。
- ・あとは端折るが、北洋漁業では、沿岸と沖合の間で資源問題が起きるのを北洋に出すことによって解決を図ろうというのを取り上げながら、一方で沿岸の栽培漁業やサケの定置で見られる協業化の推進を上手く表現できたらと思う。
- ・サケの漁業権の切り替えは、もう少し補足したい。
- ・水産加工をどうしたらいいか。地域産業としては函館・釧路とかあるが、それにも触れた方がよいか。

【坂下部会長】

- ・水産加工に触れないのは、結構大きな変更ではあると思う。

【宮澤委員】

- ・触れることはもちろん可能。

【坂下部長】

- ・全然触れないという話ではないだろう。特に地域構成というのが面白いと思う。形によって地場との関係がずいぶん違って出てくるので、その辺で触れるのがよいのではないか。
- ・漁業は占領下の再建期というのがすごい。海から外に出て行くのを止められたというのだから。マッカーサーがライン引いたという話はあまり知らなかった。

【宮澤委員】

- ・それで内側があふれかえてしまった。食糧増産が必要で、しかも闇市で儲かるから過剰になるわけで、それをどうするかというのがスタート地点だった。

【坂下部長】

- ・漁師に牛を飼わせたり、農漁業が自営化する時に合体するところもあった。林業にもそういう面がある。

【宮澤委員】

- ・転業促進も一応試みた。青函トンネルもそうで、出稼ぎさせたりと。

【坂下部長】

- ・やはり漁業は北洋というのが戦前にあって、それが戦後大きく改革されたという感じがする。

<資料3-6/工業、資料3-7/情報・通信>

【板垣委員】

- ・まだ模索中だが、幅広い工業をどう体系づけるかが悩みどころであり、統計を出して説明するのが一番楽な方法だと思われる。
- ・企業中心で進めているため、木を見て森を見ない状況にある。企業にとって重要なトピックが、北海道産業にとってどのような意味を持つのか、兼ね合いに悩んでいる。
- ・社史編さんの元になった資料を期待して資料調査を行っているが、無いところも多く、そうした企業は二次資料を中心に収集せざるを得ない。
- ・北海道にとって食品工業は重要。水産加工業も一応その中に入れていますが、製菓や飲料関係なども含めると非常に多くなる。掲載資料の点数に制約がある中で、どこまで入れられるか検討を要する。よつ葉や雪印は外すわけにはいかない企業で、優先して取り組むつもりですが、もう少し悩みながら整理させていただきたい。
- ・情報・通信の分野は、最近はインターネットのイメージが強いが、放送・郵便・新聞のほか電信・電話も入ってくるので結構な分量になる。
- ・インターネットの関係はほとんど知識がないので、いろいろな方のご意見をいただきたい。

【坂下部長】

- ・大項目二つを担当するのは大変だと思う。工業関係の資料は、農業・林業関連でもそれなりにある。

【宮澤委員】

- ・水産加工業は、こちらでフォローする。

【小田委員】

- ・工業ではいろいろな企業名が挙がっているが、戦前から北海道の工業でよく言われているのが、

大企業と道内地場産業との「二重構造」で、これには是非触れていただきたい。

- ・ 1960年頃から70年頃まで、本州に本社のある企業が、北海道でどれだけの従業員と出荷額を占めていたかという工業統計資料があり、本州企業の独占状態であったことがわかる。しかし、王子製紙をはじめ多くの企業が北海道を席卷している状況が道議会で問題視され、この統計調査をやめてしまった。確か10年分くらいはあったので、ぜひ使っていただきたい。鉄鋼業などは90%に及び、高度成長期までいかに本州企業が北海道工業を支配していたかがわかる。

【板垣委員】

- ・ その統計資料は現在どちらにあるのか。また、地場産業について資料や情報があれば、扱っていきたいと思う。

【小田委員】

- ・ 1960年代の工業統計の北海道版に、きっと入っていると思う。
- ・ 地場産業では、農協の澱粉工場や木工所などがあるのではないか。

【坂下部長】

- ・ 農産物などは、農協の関係のものが取れると思うので、私の方で調べてみたい。

【板垣委員】

- ・ 機械工業のうち、農機具関係ということで農業機械工業会を当たってみたが、一部の会員企業の資料・統計のみで全体をカバーしておらず、かなり限定的だと言われた。地場産業全体を見渡せるような資料が見つからないのが現状。

【坂下部長】

- ・ 北大農業工学科の元教授、高井宗宏先生が何か教えてくれるかもしれない。

【板垣委員】

- ・ やはり大きな流れを考えた上で、それを説明できるようなトピックを拾っていき、資料だけで説明できるというよりは、解説の中で説明していくしかないと思っている。上手くいったとしても、並立して全体像が見えてこない危険性がある。

【佐藤委員】

- ・ 造船業の函館どつくなど、輸送機械の関係もあるが、考えているか。

【板垣委員】

- ・ 他にいすずなど自動車関係の工場などもあるが、まだ調べきれていない状況。

<資料3-8/商業>

【満菌委員】

- ・ まだ具体的な資料を選定する段階までは行っておらず、また時期区分についても、一般的な流通史の区分と北海道に即した区分とをどのように考えるべきか検討している。
- ・ 大枠では中項目2つなので、流通政策・物流・卸・小売りといった全体を見る項目と、具体的に地域に則して、地域商業の動きとして実感を持って見えるような項目とで分けてみたらどうかと思っている。
- ・ 流通政策についても、国の全国的な政策があり、その中で北海道がどのように動いているかがわかるような形で資料を挙げていきたい。
- ・ 物流・卸のところでは、50年代頃から流通業務団地や卸売り団地が整備され、北海道の物流

網、流通網がどんどん整備されてくる歴史があり、交通の方との絡みも少し出てくるが、流通業・業務団地などのトピックから切り込めば、あまり重なることはないと思う。

- ・水産加工品やホクレンの農産品などの生鮮食品は、流通であれば他の分野と重なる面があるが、卸売市場なども拾いながら書ければ、重ならずによく整理できていると思う。
- ・小売りの話は、道内の企業と道外から進出してくる企業との両方を見ながら進めて行きたいが、資料は道内の企業を中心に収集したい。今のところ、小売り関連ではコープさっぽろに2回ほど足を運び、ある程度中身の確認はできているが、こちらのほしいトピックと残されている資料との兼ね合いで、何を選ぶかが難しい。
- ・地域商業の方は、主な都市の商工会議所資料を一通り当たり、小樽ではかなりの収穫があり、旭川や苫小牧でもそれなりにまとまった資料が得られた。地域に即して描く地域商業の都市は、最終的に取捨選択し絞り込みが必要になる。
- ・地域商業という項目を立てると、2000年前後から活性化してくるまちづくりの話が、商店街との関係で歴史的に見えてくる。そのため、小売業態の中に商店街を立てず、地域商業の項で商店街と大型店を見通せるようにした。

【坂下部会長】

- ・商業も蓄積が少ないので、掘り起こしに随分苦労されながらも、だいぶ進んできている印象を受けた。時期的には、中心市街の再編のところで終わる形になるのか。

【満菌委員】

- ・2000年前後にそのような動きが活性化してくるので、それが見えてくるところで終わる予定。

<資料3-9 / 交通・交通基盤>

【市川委員】

- ・最初に与えられた分担としての中項目は、「交通」と「交通基盤」の区分だったが、この2つは一体的なものが多く、切り分けるのが難しいので、「鉄道」と「自動車・海運・航空」という形で分けてみた。
- ・時期区分は坂下部会長の農業部門を踏襲しており、この区分で不都合はない。
- ・「鉄道」の小項目は、「国鉄（及び後継のJR）」と、「私鉄・都市交通」とに分けた。「国鉄」は、路線・設備建設、輸送、組織・交通政策の細項目を立て、「私鉄・都市交通」は、札幌・函館・旭川の都市交通と、夕張や定山溪鉄道などの地方鉄道のほか、簡易軌道があるが、これは高度成長期にほぼ消滅する。
- ・大まかに言うと、国鉄の場合は、ある時期までに鉄道網が発展してきて、さらに電化、交通体系の函館中心から札幌中心への変化、青函トンネルの開通、赤字ローカル線の維持をどうするかという問題があり、最後に国鉄民営化とJR北海道の発足、といった流れになろうかと思う。
- ・「自動車」は、最初の方はトラックやバスが主流で、それが次第にマイカーになっていくが、関連して道路整備が進められるため、基盤整備と分けるのは難しい。
- ・「海運」は、内外航路に加え、北海道としては青函航路が入口として必要であろうと考え、わけることにした。港湾整備は、小田先生や板垣先生と重なるかもしれない。
- ・「航空機」については、航空や空港整備が途中から入ってくる。
- ・資料では、取りあえず資料2の資料収集状況表に載っている資料を黒丸で年表内に落とし込んで

でいる。

- ・旭川電気軌道やじょうてつ、ふるさと銀河線などの資料が集まっており、私鉄関係はこれで十分と思っている。
- ・路線自動車の方は、高度成長期以降は路線開設の意見書や、平成中期以降は過疎化に伴う廃止の問題などが出てきて、路線バスの維持問題が出てくる。
- ・古い時代の国鉄の資料を集めきれないで、この辺をどうするのが課題。その他、航路、飛行機関係は今後資料を収集していく必要がある。
- ・白丸で書いた資料は、資料名だけで中身を見ていないが、今後収集を検討していきたい。札幌市電に関しては、札幌市公文書館の資料で足りる。函館市電の方は現在集めてもらっている。
- ・苫小牧工業港については、工業地帯の開発関係ということで念頭になかったが、苫小牧港の港湾整備は今後詰めなくてはならない。
- ・洞爺丸についても、海難事故として取り上げるべきトピックであり、道新の記事などで対応することを考えている。
- ・交通体系が変わっていくことについては、満菌委員が新交通体系に関する資料を収集されていたようなので、その資料も挙げさせてもらった。

【奥田委員】

- ・内海輸送では、鉄道輸送とトラック輸送との関係が一つの論点になると思う。トラック輸送ではRO-RO船というのがありますが、どのように内海輸送が発展してきたのかも、視野に入れてほしい。
- ・農業と関わってくる話だが、乳業の生乳輸送を担ったほくれん丸の就航の経緯などにも触れてほしい。ほくれん丸は、トラックごと輸送するのではなく、ミルクの保冷機能のあるタンカーみたいなもの。

【市川委員】

- ・鉄道と連絡船による輸送から、自動車とフェリーやRO-RO船による輸送へというのは、大きなトピックに入れた方が良さそうだ。また農業でなくこちらで扱うべきか。

【東山委員】

- ・先程も乳業や甜菜糖業の話が出ており、それらとの関わりで農業生産が展開されるケースもあるが、農業担当では、農業生産のことだけ扱えばよいと思っていた。

【坂下委員】

- ・通史では農業のところでも触れることになると思うが、資料編では資料点数の制約から農業で扱いきれないと思うので、ほくれん丸の資料は市川先生の方でお願いしたい。

<資料3-10 / 石炭産業>

【青木委員】

- ・この中項目に入っていない旧産炭地と鉱業の部分で、もう1枚資料を作ろうとして作業していたが、間に合わなかったので、石炭鉱業の部分だけ紹介させていただく。
- ・坂下部会長のフォーマットにそのまま落とし込んで対応年表を作成した。石炭政策的な部分では、戦後復興期、エネルギー革命期、総合エネルギー政策期という区分にしているが、戦後は需要の変動やスクラップ・アンド・ビルド危機で、新エネルギーも石炭政策時期に関わってくる。もう少しそうした区分を入れたいと、年表を作りながら感じた。

- ・労働と関わるのは、炭労と全炭鉱の部分。その他、経営関係と石炭協会の流れ、炭鉱の技術の変遷、トピックス的になるが、災害についても入れる予定。
- ・丸囲みの数字は、資料調査で集めた資料の No.に該当するが、掲載を確定したものではなく、もう少し資料を拾い出しながら、適切に配分していきたい。
- ・産炭地域の関係では、どのような切り口にすべきか見えていない。産炭地振興法の中での変遷も盛り込むべきとも思うが、未だそこまで達していない。
- ・先程、坑木の話があったが、自分の方ではそこまでフォローしきれないので、できれば柿澤先生の林業の方で扱っていただきたい。
- ・豊羽鉱山などは2000年代まで存続したものの、戦後以降に主立った道内の非鉄鉱山はなく、イトムカ鉱山なども戦後はさほど生産量を上げていないことがわかった。それらを入れ込みながら北海道の鉱山、非鉄鉱山の関係を進めていきたい。
- ・最後の第8次・9次の石炭政策では、あまり大きな動きもないため、その辺の資料をどう落とし込むかが今後の作業になる。
- ・今回収集した資料は、主に慶應大学図書館の資料や労働資料センターの資料であり、今後は、釧路市中央図書館の太平洋炭硯関係資料などを中心に進めていきたい。ただ戦後の資料は、企業として公開不可のものがあつたりするため、よいと思った資料でも収集できなかったケースが結構あつた。
- ・おそらくエネルギー分野と相当重なる部分があるので、小坂委員と調整していきたい。

<資料3-11/エネルギー>

【小坂委員】

- ・私の表も、坂下部会長が最初に示された表にエネルギー部門をかぶせたというものなので、時期区分は全く一緒。
- ・石炭については思い切り省略した。つまり、石炭を掘って供給するという部分については、私の方では基本的には取り扱わず、石炭を燃料とする石炭火力がどのように位置づけられてきたかという観点で、石炭を取り扱うことにしたい。石炭の採掘・供給や、国の石炭産業の政策などはある程度触れざるを得ないが、基本的に石炭は、電力源、エネルギー源としてのみ扱うというスタンス。
- ・傾斜生産方式というのはどこでも共通だが、電力との関係でいうと、傾斜生産方式の後、水力の開発に力が入る時期がある。これがエネルギー分野の特徴的なところである。
- ・電力①と②は、①が日本全体の話で、②が北海道限定の話ということで分けている。電気事業法はスペースの関係で②に入れているが、本来は①に入る。
- ・エネルギー分野での北海道の特色として、日本の現在の石炭火力は重要な比重を占めているが、国内炭を燃料にするのは北海道にしかなく、55年の砂川火力以降の石炭火力の流れは一つの筋になる。次第に数を減らし、今では奈井江と砂川しか動いていないが、北電の内陸火力発電は、石炭鉱業を牽引していく上でも重要な位置を占めている。
- ・80年代から始まる苫東厚真は海外炭を選奨するのが目的であり、内陸火力と海外炭火力の並行路線が始まっていく。比重としては厚真の方が多いが、火力発電と石炭との関わりは、北海道の特徴として欠かせない。
- ・戦後改革期と高度経済助走期に、無灯火集落の解消問題を入れているが、農村・漁村中心に電

力供給体制をつくる時の、北海道における政策的力点がここにある。

- ・農業部門とも関わるが、酪農がパイロットファームなどで進んでいく時に、牛乳の冷却装置などで電力の必要性が叫ばれたが、こうした農村地域における電化問題にも、力点を置きたい。
- ・自然エネルギーの項目でも、占領期から高度経済助走期に開拓地電気導入補助を入れている。この時の補助の対象はほとんどが風力発電で、地場の限られたエネルギー源を開発するという活動への補助が行われた。後に再生エネルギー・自然エネルギーの問題が出てきて、政府はサンシャイン計画などで力を入れてくるが、地産地消型のエネルギーというのが、北海道では連続と続いていることを位置づけたい。
- ・2000年前後から現在の電力自由化の動きが始まっているので、そこにつなげるような年表にしたいが、2000年で切ると中途半端なので、悩ましく思っている。
- ・項目立てしているところが資料の対象となるが、資料のはめ込み作業はこれからという段階。

【奥田委員】

- ・2000年の問題については、概ね基本とするということで了解されており、例外を一切認めないということではないので、どうしても流れの中で必要であれば、取り上げて差し支えない。電力自由化は何年で、その資料として掲載したいのはいつ頃のものが。

【小坂委員】

- ・95年が卸売り電力の最初だが、小売りは2004年から始まり最後は2016年になる。自由化の資料は相当あると思うが、前半のところで大半が取られるので1点程度か。

【奥田委員】

- ・その1点がだめだという話にはならないと思う。

<資料3-12/金融・観光>

【佐藤委員】

- ・年表の時代区分は、奥田先生の区分を参考にして作成したが、これに沿ったはっきりした政策がないと感じた。金融についての各項目は、都市銀行・地方銀行・相互銀行・信用金庫・公的金融機関・証券取引所に分けてみた。
- ・金融機関は広報誌や周年誌が結構発行されており、ほとんど私の手元にある資料を使うことになるが、道立文書館に拓銀の広報誌などがたくさんあった。掲載は15点と制約があるので、かなり厳選しなければならない。
- ・金融関係で一番注目されるバブル期やポストバブル期の公的な資料があまりないので、新聞や雑誌の記事に頼らざるを得ないかと思う。
- ・拓銀破綻に関して、北大の附属図書館に河谷頭取の裁判記録があり、資料の閲覧と写真撮影を行った。相当重要なものを含んでいるが、附属図書館の方では掲載の可否についてはこれから検討するとのことで、寄贈者との協議等によっては掲載できない可能性もある。
- ・都市銀行の最後の項目に入れた「建設業協会史」は、公共工事の発注額の推移が出ており、北海道経済に与えた影響の大きさがわかる。また、信用保証協会や帝国データバンクの資料なども統計データが中心であり、これを掲載資料として扱ってよいのかが問題。統計の扱いについては検討していただきたい。
- ・道銀も60年史を刊行しているので、現在、編さんの際の一次資料の提供をお願いしているところ。

- ・観光については、産業の集積なので他分野と重なる部分が多そうだと心配していたが、これまでの話をお聞きした限りでは、さほど深刻な重なりはないものと思っている。なお、商業の関連では、例えば六花亭や石屋製菓、ロイズなどの土産品に限定して取り上げたいと思う。
- ・高度成長期に置いた「入り込み数」、ポストバブル期に置いた「リゾート数の推移」など、観光についても統計的なものは必要になってくるので、これも統計の扱いをどうするか検討いただきたい。

【坂下部長】

- ・統計は掲載してはいけないわけではないが、統計だけ出しても解説してあげないと読者にはわからないので、通史編で取り上げるのがよいと思う

【奥田委員】

- ・北海道史の資料編には、統計資料が掲載されていた。あの時代は、統計の現データに当たれることがすごいことで、それを一つの統計として並べるとはそれなりに意義のあった時代だったが、現代では全て電子情報で入手できる。一つの統計を通年並べたものを資料編とするのは馴染まないと思う。
- ・ただ他の県史を見てみると、統計は資料として使われてはいるのではないかと。最初の申し合わせでも、統計を全て排除するものではないという見解だったので、例えば、資料の中で統計が使われている、という形をとるのが一番望ましいのではないと思う。
- ・どうしても必要であれば、独自に統計を使うのも仕方がないと思う。特に一般的に目にすることができず、放置しておけば散逸してしまうような統計は、保存しておく価値があると思う。

【東山委員】

- ・資料編には年表は付かないのか。

【事務局】

- ・年表は別につくるので、資料編の中に年表は入ってこない。北海道史別冊の年表の形態を踏襲し、産業経済、政治行政、社会教育文化の各分野に分けて作成する予定。
- ・他の県史で統計編をつくっているところもあるが、その場合でも戦後については端折っている。また、資料編の中に統計を入れている場合というのは、白書のように解説を付けた中に統計が入っていて、その統計のみならず文章を読み込むことでわかるようになっている。一般道民が対象なので、補助的な解説のない、数字だけの統計では難しい。統計を解説付きで載せるとなると、通史編の方が馴染むのではないかと。

【小田委員】

- ・金融は佐藤先生として、財政は誰が担当するのか。

【事務局】

- ・財政は、政治・行政部会で担当することになっている。

【満菌委員】

- ・先ほどの観光のお土産品の話になるが、私の収集資料にお土産品に関する小売りの調査資料などがあるので、佐藤先生にぜひご覧になっていただきたい。

【市川委員】

- ・交通関連の小項目については、どのように切り分けたらよいか。

【佐藤委員】

- ・空港50年史や北海道中央バスの50年史を見ているが、飛行機については千歳空港ができた経緯、バスについてはニセコの交通関係に少し触れるだけで、それ以上踏み込むつもりはない。

<労働関係>

【宮田委員】

- ・事務局の方から、全部を網羅しなくていいので北海道らしい労働運動を書いてほしいと言われたので、特徴のある運動のみを取り上げ、北海道の労働運動の特徴を浮き彫りにしたい。
- ・北海道の労働運動の特徴としては、全道労協の影響が大きく、道内各地域に地区労があり、地域総ぐるみ闘争を行っていた。今では、連合と道労連があるが、そのローカルセンターとして地区労連と地区連合があり、これも北海道だけである。
- ・労働争議もいくつか取り上げたい。1つ目は道内で有名な王子製紙の争議。2つ目は北教組の学力テスト問題で、これは炭労の果たした役割が大きい。3つ目は、国鉄分割民営化に伴う採用差別事件で、自分はこれに30年付き合っており資料もあるので、経過と展開を浮き彫りにしたい。
- ・時代区分からいうと、1985年から2000年までは新自由主義の準備段階と捉えられ、2000年からが本格的な新自由主義段階になる。2000年以降は労働組合が衰退し、中核労働者と言われる正規労働者が減少して、周縁労働者が増大していく。そういう捉え方の中で、新しい組織形態として地域労組があるが、その辺も実態調査していきたい。
- ・炭労も、あくまで労働運動そのものの中で位置づけ、それがどのような影響を及ぼしたかというところを書いていこうと思う。
- ・道民向けの道史ということで、各労働運動の特徴や問題点がわかるように取り上げたい。

【坂下部会長】

- ・産業経済という枠の中ではあるが、労働に関しては少し違うような気もするので、一応9番目までは横並びになるが、この部分は位置づけを変えていただいた方が面白い気がする。

【奥田委員】

- ・日本全体の労働運動で大きな位置を持つ日鋼争議には触れないのか。

【宮田委員】

- ・日鋼争議も考えてみる。

【市川委員】

- ・交通の方では、国鉄は輸送機関としてしか書かないので、国労については宮田先生の方でお願いしたい。

【坂下部会長】

- ・今日は韓先生が欠席で、サービス産業についての確認ができなかったが、機会をみて説明してもらおうと思っている。

(2) 今後の予定について

【坂下部会長】

- ・先ほど東山委員からも質問があったが、皆さんに心構えをしておいてほしいので、今後のスケジュールについて事務局から説明してほしい。

【事務局】

- ・資料4をご覧いただきたい。上の表は、委員と事務局に分けて作業工程を記載した工程表で、下に示した全体のスケジュール表を詳細にしたもの。刊行が2022年度（令和4年度）の3月と決まっているので、そこから遡ると、この表のようになる。

- ・まず事務局の欄を見ていただきたいが、来年の4月から、資料の筆耕作業（文字起こし）を始めるので、実際に掲載するものよりも多い点数の候補資料を挙げていただきたい。遅くなってまとめて提出されても事務局の筆耕作業が追いつかないので、早ければ早いほど助かる。その際に、「どの資料のどこからどこまで」というように具体的に示してほしい。
- ・資料調査については、すでに最終段階に入っており、基本的に来年9月で終わっていただきたい。その頃には、4月から筆耕した分量がある程度が見えてくると同時に追加調査も想定されると思うので、これを3月までの半年間で終わっていただきたい。3月頃には、予備選別で選んだ資料の総量が見えてくるので、その中から掲載資料として何を選ぶのか、本選別作業を行っていただきたい。
- ・2021年度に入ると、5月頃には掲載資料の範囲が確定するので、事務局は著作権処理、原本所蔵者に対する掲載許諾の作業を始めることになる。先ほどの北大附属図書館のように、公表が危ぶまれる、可否判断に時間のかかりそうな資料は早めに示していただき、相手方に時間の余裕をもって投げかけておきたい。
- ・資料の解説部分の執筆は、本選別と並行して作業いただき、6月に解説原稿を締め切りたい。
- ・その後、印刷業者と契約して9月頃に入稿。資料編の校正は5校程度を想定しており、入稿から2022年度（2023年）3月の刊行までに1年半程度は必要とみている。
- ・以上が刊行までの大まかなスケジュールだが、この工程を元に、柱立てをいつまでに行うか、近接する分野との調整をいつまでに終わるかなど、部会として各々ご検討いただければと思う。

【坂下部会長】

- ・今年度いっぱい是我々の部会の資料調査が優先されるので、確定していないところでも探るような調査を行っていただきたい。来年の9月末までには8割くらいは確定させ、残り2割の補足調査を行い、来年度いっぱい資料を全部揃えてしまう。
- ・その間、事務局の方では掲載候補の資料をテキストに起こす作業があり、今年度ほど資料調査に付き合えなくなるので、行きたい調査先があれば今年度中に行っておいてほしい。資料については固まったところから次々に事務局に渡してテキスト化していく。
- ・並行して横との調整なども行い、2021年の3月には、資料の関係は終わらせる。
- ・その後に資料の解説記事を書くことになるが、締め切りが6月で2ヶ月程度しかないので、事前に着手しておき、2021年の6月には資料編の作業を全て終わらせる。理想としてはそういう形だろう。

【満菌委員】

- ・予備選別についてだが、資料1の分担案で担当ごとの頁数と掲載点数が割り振られているが、優先されるのは掲載点数なのか、それとも頁数なのか。つまり、資料によっては短いものがあり、頁に余裕ができたときに少し資料数を増やすことは可能なのか。

【坂下部会長】

- ・スペース、頁数で考えていただきたい。短い資料であればそこにたくさん入れられる。最後に足りなくなること予想されるので、多めに資料を準備しておき、余裕があれば追加するという方法がよい。

【奥田委員】

- ・できあがりのイメージはもうできているのか。A4版で何行など。

【事務局】

- ・『山口県史』の体裁に倣うとのことだったので、B5サイズで、25字×17行の2段で1頁と計算している。

【坂下部長】

- ・今日の発表を聞いていて、意外と多くはできないことがはっきりした。自分に与えられたスペースの中で最大限努力するというのは、そんなに無茶な話ではないと思う。
- ・3月上旬頃に次回の部会を開催したい。今日、漁業の話など面白いと思ったが、実際に作業をしている人の話を聞くと参考になるし、生産性が上がると思う。少し進んでいる人に発表してもらう勉強会形式で行いたい。

(3) その他

【奥田委員】

- ・私が編集委員ということになっている機関誌『北海道史への扉』について説明する。第1号の構成は別紙のような案になっており、産業・経済部会からは、青木先生に執筆いただくことになっている。
- ・紙媒体では出さず、電子ジャーナルという形によりHP上で公開するということになるが、ISBNを取得し雑誌登録する予定。
- ・今回は1号ということで、新たな道史への要望といったところに重点が置かれているが、第2号以降では、産業・経済部会が一番早く進んでいるので、研究論文や研究ノート、調査報告など、ぜひふるってご執筆いただきたい。

【小田委員】

- ・発行はいつになるのか。現物を見てからでないと、どんな内容なのかイメージがつかめない。

【奥田委員】

- ・原稿の締め切りが1月末で、発行が3月。
- ・普通の雑誌などの論文の小さめというイメージ。電子雑誌なので印刷費の問題はないが、あまりにも不釣り合いになってしまうのも問題。

【坂下部長】

- ・今回は、部会を代表して青木先生が執筆することになっているが、今後は皆さんに論文、研究ノートや調査報告を書いていただくので、その心構えをしておいてほしい。
- ・道史編さんでの調査成果を使って論文を書く場合、原本所蔵者への承諾の必要になるため、事務局に連絡していただくことになる。

3 閉 会

(了)